九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

実在としての記憶 : ベルクソン『物質と記憶』における「記憶」の概念について

釜堀, 幸
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494647

出版情報：比較社会文化研究. 21, pp.1-12, 2007-03-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第21号（2007）1～12
Social and Cultural Studies
No. 21 (2007), pp. 1～12

実在としての記憶
― ベルクソン『物質と記憶』における「記憶」の概念について ―

Memory as Reality
On the Concept of Memory in Bergson's *Matter and Memory*

釜堀（カマホリ）　幸（ミユキ）

序

本稿は、ベルクソンの著書『物質と記憶』における記憶の理論を、主に第二章の知覚と記憶の関係を軸に考察するものである。ベルクソンは同書第一章において、知覚される実在を端的に「イマージュ(images)」と規定し、動性・変化性そのものとしての実在を、「私が感官を開けば知覚され、閉ざせば認められない幾多のイマージュ」(MM 11)の総体として描きだす[1]。

「対象はそれ自体で存在し、また、それ自体において、私達が認める時のままの生彩ある姿をしている。これはイマージュだが、それ自体で存在するイマージュである」(MM 2)。

ベルクソンは、我々が常にその中に身を置いているところのいわゆる物質世界や外的諸事物を、それ自体で存在し、我々が認める通りの姿をしたものと見做している。しかしそれは固定的な輪郭や一定の形態を有するものとして「ある」とか、その様態のあらゆる細部を我々に与えるものとして「ある」ということではなく、物質はそれ自体で存在するが、その「与えられ (données)」は、身体を媒介とする知覚機構によって限定されているという意味である。つまりベルクソンの言う「物質の知覚 (perception de la matière)」とは、流動する実体そのものである実在から、身体がその利害に関わる側面だけを照射している事態を指すのである。

ここで興味深いのは、イマージュを知覚する我々の身体それ自身についても、他の全てのイマージュ同様、一個のイマージュという位置付けがなされている点である。ベルクソンにとって身体とは、「それに作用する対象とそれが影響する対象との間に介在する伝導体」(MM 81)であり、それ以上のものではない。身体の役割は、周囲の諸イマージュから様々な作用を受けるとともに、それらの作用を、身体が形成する特定の運動機構を介して他のイマージュに伝えることにとどまるのである[2]。

我々の身体が、実在全体から知覚機構を介して照らしだされる一つのイマージュにすぎないということ。我々の身体が、その知覚対象と何ら本性上の差異を持たないイマージュであり、この身体イマージュを介して同一の実在の内部での諸限定がなされるということ。第一章において示されるこの実在観は、続く第二章では更に深い射程をもって探究される。そこで本論に入る前に、第一章のイマージュ論が、二章以降で論じられる記憶論とどのような関わりを有するのか、簡単に触れておきたい。

第一章の眼目は、実在の多様な在り方を蓋然性をもって示すことに置かれている。我々が何らかの対象について「ある」「存在する」と言う時、精確にはいかなる意味においてそれは「ある」のか。またそのようなものとしてそれがある根拠をどこに求めるべきなのか。ベルクソンの規定によれば、物質世界とは、身体（これも物質の一部である）を通して照らしだされた、限定された実在である。従って我々の知覚する諸対象、またそれらの対象を知覚する我々の身体それ自体も、各々固有の性質を呈するそのあり方を、身体の知覚作用によって決定され、保証されているのである。この観点からすると、身体という知覚装置を介さなかった場合、たとえば我々の眼には身体イマージュとして与えられていたものがいかなる仕方で存在するのか、明言することはできないことになる。

これは存在そのものの定義に関わることである。我々の知覚する物質が、身体にとって「その通りに」存在するということ、身体との利害関係において「見た通りのものとして」存在することが強調される。物質は、身体との関係性という限定のもとで「あるがままに」存在する。問題は、そのような限定のもとでの対象の実在性であり、対象の見え方であり、様態であり、与えられである。実在するもの

の、その実在のうちでのあり方の可変性、相対性を示すことによって、物質でないもの、すなわち身体の知覚対象でなく非存在と見做されているものが、身体との関係性においてのみ非存在であることが顕にされるのである。

身体との関係でいわばその「与えられ」及び「存在」が保証されている物質。与えられと存在の成立とその限界を描きだすことによって、ベルクソンは、「与えられ」てはいるが身体が知覚しないもの、物質レベルでは存在が認められないもの、要するに精神や記憶と呼ばれるものの存在を確保するのである。

そこで『物質と記憶』第二章は、身体との関係性においてのみ非存在であるものの実在性、つまり記憶の実在性の考察に充てられることになる。しかし問題は、記憶の実在性 (réalité) それ自体にはない。なぜなら記憶は、身体との関係で非実在的なものと性格づけられているが、このことは単に、記憶が物質とは異なる存在様態を有し、物質とは異なる仕方で与えられることを示すのみであるからだ。

従ってこの見地からすると、身体という特定のフィルターに対する自覚なしに、身体との関係の中で記憶の在りかを問うこと、即ち記憶が身体の「どこに」「どんな形で」「保存」されているのかを問うことは、探求の方向を取り違えることになる。なぜなら、脳等の物質の中に記憶の在りかを捜し求めることは結局、イマージュの総体の一部分でしかない脳物質の或る点に、その他の全イマージュを位置付けようとする、無意味な試みにすぎないからである。

問題は、記憶が常に全面的に開示されているのではなく、隠されているのはなぜなのか――その結果我々には記憶が身体によって保存されているように思われるのだが――、そして身体による記憶の隠匿が行なわれているとすれば、それはいかにしてなされるのかということである。記憶が物質レベルにおける知覚対象ではないならば、それはいかなる様態において、またそれ自体において「ある」ものなのか。

イマージュ論に始まるこの論考は、最終的には時間の生成の問題を内包している。動的全体としてあらゆる相互作用が一挙になされるところの実在の総体から、現在の知覚対象とはならない諸作用がいかにして生じるのか。つまり身体を介して現に知覚されるのではない諸作用としての「過去」や「未来」はいかにして生じるのか。ベルクソンは、継起的な時間の成立を記憶によって説明するに至る。

本稿では、第二章における論証のうち、特に以下の問題に焦点を当てる。第一章で示される諸々のイマージュ、実在の限定的な与えられとしてのイマージュは、いかなる仕方で過去のイマージュ、つまり記憶となるのか。またそれはいかなる理由によってそうなるのか。これらの点を明確にすることが本稿の目的である。

1．保存の意味の転換

実在の総体から、身体の利害に関わる物質の諸側面のみがその感覚的性質として限定されるというイマージュ論において、身体を媒介とする物質の知覚とは、身体とその他の諸対象を「知覚するもの」と「知覚されるもの」として厳密に区分した上で考察されるべきではなく、身体を中心として実在全体のうちに張り巡らされた無数の作用反作用の連鎖という意味で理解されるべきものである。身体とは、前もって確定されている独立的な「個」としての中心ではなく、イマージュ相互の作用を中継し、周囲の無数のイマージュと分かちがたく連動するものとしての中心であり、自他の区別や主観客観の区分がそこから分節化されてくる出発点としての連鎖の中心である。

> 「身体を取り巻く事物は身体に作用し、身体はそれらに反作用する。その反作用は、経験がその組織の内部に設けた装置の数と性質に応じて、多少とも複雑であり可変的である。だから身体が過去の行動を蓄積し得るのは、運動の装置としてであり、また運動の装置としてに過ぎない。そこからして、本来の意味での過去のイマージュは、別な仕方で保存される」(MM 81-82)。

身体が、周囲の対象との間に多様な相互作用の連鎖を形成し、それらの作用を中継する「中央電信局」(MM 26)として働いているということ。身体それ自身も、多種多様な相互作用からなる動的組織を形成しているということ。このことからベルクソンは、身体が記憶の貯蔵庫とはなりえないと結論づける。なぜなら、それ自身無数の諸作用から成るものとしてその存在様態が限定されている身体機構および脳が、その内に、当の作用以上の何かを保持することは出来ないからである。例えば私が知覚した諸対象や、これまでに経験した様々な出来事の心像といったもの、つまり現在を占有しないものが、現在の物質作用の中にそっくり貯蔵されていると推測することは、物質の内に何かわからない不可思議な、神秘的な力を認めることであり、それは全くの不条理を意味するであろう。なるほど身体（脳）は保存の器官である。しかしそこで実際に蓄積されているのは、身体を形成する動的組織が行なう無数の相互作用であり、また身体自身が行なう運動である。身体が保存しているのは、作用としての記憶、運動としての記憶なのである。

では、脳が運動の貯蔵庫でしかないとすれば、過去のイマージュはいかなる形でその存在を維持しているのであろうか。つまりベルクソンの考える記憶とはいったい何を指示し、いかなる存在様態を有するのか。

第一章の議論から言えることは、記憶とは、身体を媒介とする知覚機構が呈示する物質のあり方、すなわち諸作用や諸運動や感覚的性質といった形で知覚される存在様態を有するものではないということだ。つまり記憶は、物質——常に身体に利害のある側面を提示する——とは異なる特殊な仕方で、その存在を生き、まっとうしている。従って身体の利害を知覚の射程とする身体に対しても、物質のそれとは異なる利益や目的をもって関わってくるものに相違ない。

第二章以降の問題は、身体を媒介とする知覚機構が、自らとは異なる様態をもつ記憶という存在をいかに排除するのか——その結果身体（脳）が記憶をしまい込んでいるように見えるわけだが——という点に絞られてくる。実在の全的運動において、即ち権利上はあらゆる種類の運動が同等に与えられているはずの全体的作用において、なぜある種の諸作用（＝物質）だけが常時与えられ、その他の諸作用（＝記憶）は背後に隠されてしまうのか。そしてそれは何のために行なわれるのか。

2．記憶 (mémoire) の二つの形式について

詳しい考察に入る前に、第二章においてベルクソンが記憶をどのように規定しているのかをまとめておこう。ベルクソンによると、一度知覚されたイマージュ（＝過去のイマージュ）は、異なった二つの形態のもとで——一つは運動機構 (mécanismes moteurs) において、いま一つは独立的な回想 (souvenirs indépendants) において——残存する (MM 82)[3]。

ベルクソンは、記憶の二つの形態を示す事例として学課 (leçon) の暗記の場面を取り上げている。学課を暗記する場合、我々は音節を区切って明確に発音しながら、繰り返し各文章を読むものだが、こうした作業を通じて言葉に馴染み、空で言えるようになってくると、その行為は自動的な、いわば習慣的な性格を帯びてくる。こうした段階になって初めて我々は、学課を全部暗記した、文章は記憶に刻まれたと言うのである (cf.MM 83-96)。

ここで最終的に機械的な運動として記憶されているのが、前述の第一の形態の記憶に該当する。運動機構という形で保存されるこの記憶においては、過去に経験した出来事は、心像（イマージュ）として思い浮べられるのではなく、運動機構を介して再現され「演じられる (jouer)」運動として身体に刻印されている。従って、この記憶を再生するために必要とされるのは、過去に知覚したイマージュを思い浮べることではなく、身体の習得した運動を遂行することである。

「それは、歩いたり書いたりする私の習慣と同様に、私の現在の一部をなしている。それは心に思い浮べられるというよりはむしろ生きられ、「行動される」のだ」(MM 85)。

ところで、過去の記憶は運動機構としてのみ蓄積されているのではない。先ほどの暗唱の事例に戻ろう。今度は、学課を暗唱する行為から離れて、学課を暗記するために文章を繰り返し読んだ、その過程を詳しく思い出してみよう。行なわれた朗読の一つ一つを思い起してみると、それぞれが固有のニュアンスや色彩に彩られ、特有の個性を帯びた出来事として我々の心に思い浮かぶ。それは機械的な運動という形で残っている記憶とは異なり、心像として思い浮べられる記憶である。この特定の朗読の記憶は、我々の生涯においてそれが占めている唯一独自の位置によって、他のものと相互に区別され、決して繰り返されることはない。ベルクソンは、この個別的な出来事としてのイマージュの登録を、第二の記憶と呼ぶ。それはイマージュとして思い出される記憶、すなわち表象としての記憶である。

「この記憶は私達の日常生活のすべての出来事を、それらが展開するにつれて、回想イマージュの形で記録するものであり、どんな些細なことも洩らさないで、一つ一つの事実や動作に、その位置と日付を与えるだろう。有用性や実践的利用を気にする下心なしに、それはひたすら本性の要求に従って、過去を蓄積するであろう。それによって、既に経験された知覚の利発な再認、というよりは知的再認が可能になるだろう」(MM 86)。

では、全く種類を異にするこれら二つの記憶——運動機構としての記憶と表象としての記憶——は具体的にいかなる仕方で働くのであろうか。ベルクソンは、両者が協同して働く経緯を次のように説明する。

我々の生活は限られた数の対象の中で流れていくものであり、それらの対象は我々の前に多少とも頻繁に現れる。それらはどれも、知覚されると同時にそれに順応するための運動を我々の側に引き起こす。これらの運動は繰り返されることによって機構を作り出し、習慣の状態に移行して、我々のうちに、事物の知覚に自動的に続く態度を確立するに至る。求心性神経は刺激を脳に伝達するが、この刺激は巧みに進路を選んだ後に、反復によって作られた運動機構、現在の知覚に順応する運動機構に伝わっていく。こうして周囲の環境への適切な反応、つまり生の目指す適応が生じるのである (cf.MM 89)。

第二の記憶は、運動機構としての第一の記憶を助け、環境への反応をより適切なものとする役割を果たす。前述の

ように、第二の記憶は我々の先立つ精神生活を、時間の中に位置付けられるその全ての出来事の詳細とともに記録し、蓄積している。それは運動機構としての第一の記憶に、過去に知覚した無数のイマージュの中から現在の状況に類似したものを提示して、身体が遂行する運動の選択をより現況に適したものにするのである (cf.MM 95)。

二つの記憶、すなわち神経中枢（脳）を中心に組織される運動機構としての記憶と、自発的に記録される表象としての記憶は、協同して働くことによって現在の状況に対するより適切な反応をもたらす。我々の身体機構は、神経系の構造上、現在の印象が適切な運動にまで発展するように出来ている。そのため原則的には、現実の知覚と整合して有益な全体を形成することの出来ない過去のイマージュは全て、現在の知覚から遠ざけられることになる。しかし、現在の身体の態度がこのように過去のイマージュを排除し、外見上は廃滅させているとしても、現在の知覚に類似した過去のイマージュ、現在の身体の態度に当てはまり得る形のイマージュは、他のイマージュよりも抵抗を受けずに現在の知覚に結びつくことが出来る。だから現在の身体運動は、過去のイマージュを遠ざけると同時に、過去のイマージュが現在の知覚に介入してくる準備をする役割も果たしている。なぜなら、我々の過去のイマージュが全てそのまま現存し居合わせているとしても、やはり現在の知覚に類似したイマージュや、現在の状況に類比的な過去の状況の前後に生じたことのイマージュが、可能な全ての表象の中から選ばれなくてはならないからである。そこで、既遂の運動、或いは単に生まれかけの運動が、この選択を準備するか、少なくとも我々が捜しにいくべきイマージュの場を限る働きをするのである (cf.MM 89-104)。

ベルクソンは、知覚した諸対象に対する有益な反作用へと移るかわりに、知覚した対象の際立った諸特徴を現出させるために過去のイマージュへと引き返すならば、現在の知覚に類似したイマージュ、現在の身体の態度に当てはまり得るイマージュを導出し得ると主張する。知覚が促す行動、即ち現在の知覚に適合する運動を行なうことをいったん差し控え、過去へと注意を向けるならば、現在の知覚に関係する既知の、限局された個人的な記憶イマージュを見いだすことが出来るというのである (cf.MM 103-107)。

では、過去のあらゆる知覚イマージュが自動的に登録されるとはいったいどういう事態を指すのであろうか。そして表象として記録されるこの記憶は、運動機構としての記憶といかにして結びつくのであろうか。この点を明らかにしなければならない。

3．身体による記憶の限定について

以上、記憶の二形態を概観したわけだが、我々は次の二点について理解を深める必要がある。

(1) 持続のあらゆる瞬間に行なわれるイマージュの完全な登録とは、厳密には何を意味するのか。

(2) 運動機構としての記憶が、記録された無数のイマージュのうち特定のものを現在の中で再生させるという時、異質なこれら二つの記憶がいかにして相互に結びつき、作用すると考えられるのか。

我々の理解では、身体を媒介とする知覚の機制は、運動機構としての記憶だけでなく、表象としての記憶に対しても深い関わりを有している。

『物質と記憶』第一章の主題は、身体による物質イマージュの限定、つまり物質の知覚であるが、それは動性、変化性そのものである実在（イマージュの総体）から、私の身体の利害に関わる側面だけを照らしだすという知覚の機制を論ずるものであった。本節では、この知覚の機制それ自体が記憶(mémoire)によって成立していることを示し、第二章の主題である「運動機構としての記憶による表象としての記憶の限定」の経緯を明らかにする。

(1) 身体による物質イマージュの限定について

この点について示唆的なのは、イマージュの総体の現存そのもの――そこから私の身体の利害に関わる側面、即ち私の身体の可能的作用が「物質の知覚」として照らしだされるところの――と、「物質の知覚」との間に、潜在的な共存関係が見出されるということである。身体の知覚機構は、その機制の成立以前に既に何らかの仕方で現存している実在による持続的な作用を前提としている。つまりそれは、知覚の成立後に物質及び身体として知覚されることになる何ものかが、ある持続的な働きによって身体機構を自己形成し、それを維持・発展させることで「物質の知覚」を確立するということである。実在における何らかの作用が、自己の動的な様態を自己保存しつつ、その内部での作用反作用を通じて、「身体イマージュ」として知覚されることになる安定した機構を形成し、身体を媒介とする対象の認識を導出するのである。

従って、これまで端的に物質的な水準において語られてきた身体機構は、結局のところ、知覚に先立って現存する何ものかによる持続的かつ自己保存的な作用から成る機構であり、いわば即自的な過去によって形成される機構であるということになる。過去の様々な作用がその効果を現在の瞬間にまで及ぼしていることを記憶と呼ぶならば (cf. MM 86-87)、知覚以前の現存による種々の作用の蓄積である身体機構とは、一種の記憶に他ならない。我々は、記憶

であるところの身体機構を介して「物質の知覚」を行なうのだ。この過去の作用の蓄積としての記憶の様態そのものについて言えば、それは知覚の機制以前の現存であり、いわば「知覚されない物質的対象」「表象されないイマージュ」(MM 158)と呼ばれるべきものである。それは、それ自体で存在する、即自的な記憶である。

「物質の知覚」と潜在的に共存する過去の作用、即ち知覚されない記憶の総体が存在する。身体にとって原的なものであるこの持続的作用を、ドゥルーズに倣って「存在論的な記憶」と呼ぶことにしよう[(4)]。顕在化された知覚の背景をなすもの、つまり身体にとって潜在的にしか知覚されないものの現存が、身体機構を形成し、それを介して身体イマージュ及び物質イマージュを照らしだす。従って「物質の知覚」とは、知覚されず表象されない記憶、つまり「一種の無意識な精神状態」(MM 158)としてのイマージュの総体から自己塑成してきた機制であり、我々が知覚する物質とは、存在論的な記憶としての実在全体から限定的に浮かび上がってくる諸像である[(5)]。記憶の容器と考えられている身体や脳等の物質も、それらを知覚する身体も、ともに様々な作用の蓄積としての存在論的な記憶を基底として与えられるものであり、決してその逆ではないのである。

このように身体は、記憶から成る機構として規定されるのであり、それゆえ物質の存立そのものも、一種の精神としての記憶から示され得ることになる。知覚と潜在的に共存する実在の動的な様態については、第一章に以下のような記述がなされている。

> 「感覚的諸性質の主観性は、とりわけ我々の記憶(mémoire)の働きによる実在の一種の収縮に存する」(MM 31)。
>
> 「宇宙を次々にとらえる我々の知覚がそれぞれ質を異にするのは、これらの知覚の各々が、それ自身持続のある厚みを占めて拡がっていること、記憶がそこに莫大な数の震動を凝縮していて、これらは継起的であるにもかかわらず全部一緒に我々にあらわれることからくる。知覚から物質へ、主観から客観へ移るためには、時間のこの不可分の厚みを観念的に分割して、好きなだけ多くの瞬間をそこに区別し、一言で言えば記憶を全くとり除けばよい」(MM 73)。

あらゆる種類の相互作用を遂行しつつ絶え間なく変化する実在、運動の総体として呈示されるイマージュの総体は、それ自体が運動であり記憶である身体機構を介して諸対象へと凝縮され、諸々の質として意識的に知覚されるに至る。つまり知覚とは、身体の側から言えば、存在論的記憶の集積（身体）による存在論的記憶の総体（実在全体）の弁別を意味し、実在の側から言えば、存在論的記憶の総体による特定の存在論的記憶（身体）の差異化を意味する。

知覚の機制を実在全体の側からも考察することは重要である。なぜなら身体によるイマージュの限定は、知覚以前の実在の持続的作用や、実在それ自体に存するある傾向、何らかの指向といったものを想定しない限り、説明し得ない動きであるからだ。身体を媒介とする知覚機構がイマージュの総体の中から「利害のある側面」だけを照らしだすというベルクソンの説明は、それ自体としては筋の通った合理的なものであると言えるが、イマージュとイマージュの間に介在して作用を中継するにすぎないはずの身体、つまり決して認識したり思弁することのない身体が、その合理的なフィルター機能を、それ自身の有するいかなる推進力によって成し遂げているのか、その説明では十分に明らかになっていない。

身体それ自身は考えられないのだから、何かがそうさせているはずである。身体という特殊な機構を確立し、知覚の機制を成立させている動きを、知覚の機構に先立つ存在による働き掛けを想定しなければならない。権利上は全体として与えられるイマージュの総体は、その動的な様態そのもののうちに、身体を、それを介して物質を、差異化する促しを内包しているのである。記憶の本性が様々な作用の蓄積にあり、その効果が現在の瞬間にまで及ぶことに存するならば、イマージュの総体も、身体機構も、身体機構を介して成し遂げられる知覚そのものも、記憶の総体の中から自己塑成してきた、それ自身また記憶であると言える。

では、ベルクソンが提示する身体による物質イマージュの限定は、過去のイマージュの限定、すなわち表象としての記憶の限定とどのように重なり合うのであろうか。

(2) 身体による過去のイマージュの限定について

前述のように、それ自体記憶から成る知覚機構は、イマージュの総体における莫大な数の運動を圧縮し、質という与えられを獲得することによって、諸々の物質イマージュを限定する。問題は、知覚機構による凝縮としてのこの記憶作用が、あらゆる出来事の完全な記録としての記憶といかなる関わりを有するのかということである。ベルクソンの規定に従えば、真の記憶とは、生涯のあらゆる出来事を、その輪郭や色彩、時間の中で生起する位置もそのままに、回想イマージュとして記録することにある（前述の第二の記憶がこれに該当する）。この過去のイマージュの完全な記録としての記憶は、身体とどのように連動するのであろうか。我々は以下の記述に着目する。

> 「赤色光線――波長最大、したがって振動数最少の光線――は、一秒間に四百兆の継起的振動を生じている」

(MM 230-231)。

我々は、赤色光線の何百兆もの振動を一瞬のうちに圧縮して一挙にとらえる結果、赤という所与、即ち質を知覚する。仮説によれば、生起する全ての出来事の完全な記録である記憶は、我々が知覚する感覚的諸性質だけでなく、端的に赤色光線として知覚されるこの膨大な数の振動をも、それらが生じたとおりに全部記録しているという。ではここで、全てが完全に記録されるというこの何百兆の振動そのものについて考えてみたい。我々はそれらの一つ一つを、明確なイマージュとして逐一知覚し、想起することが出来るであろうか。特殊な設備や方法をもって観察しない限り、それらの振動をまざまざと見届けることも、思い浮かべることも決して出来ないであろう。そうであるならば、赤色光線を形成する振動そのものの意識的知覚を持たず、それを明確なイマージュとして想起することが出来ないにも関わらず、なぜ我々は赤色光線という与えられを獲得し、それを想起することができるのであろうか。

生起する全ての出来事が、その深部で生じている膨大な数の振動をも含めて全部記録されており、この完全な記憶のおかげで莫大な数の振動が保存され、質が獲得されるのだとしても、この記録の中から判明なイマージュとして我々が知覚し、想起し得るのは、既に質へと圧縮されたものだけである。これはいったい何を意味するのであろうか。

このことは、全てを記録する記憶というものが、私の意識的知覚の外にまで拡がっているということ、つまり記憶とは、特定の誰かの記憶としてではなく、記憶一般として、それ自体で存在し、作用するものであることを示している。

通常我々は、自分が見聞きするイマージュが自分の記憶を形成すると思っている。我々が過去の記憶を有するのは、対象を知覚するからであり、知覚したイマージュを何らかの形で保持しているからだと思っている。しかし、知覚機構における無数の振動の凝縮過程そのものについての判明な意識なしに、その凝縮作用の結果である質を知覚し、それを記憶しているということは、私が赤色光線を質として知覚しているその瞬間にも、私の意識的知覚の及ばないものとしての記憶作用、すなわち我々の身体機構の震動や、知覚機構の震動、更に知覚機構が圧縮する赤色光線の膨大な振動といったものが、既にそれ自体で保存され、即自的に働いていることを意味する。

つまり我々がイマージュを知覚し得るのは、何よりもまず、身体機構の震動、知覚機構の震動、赤色光線の震動等が、まずそれ自体で残存し、その働きを持続しているからに他ならない。そしてこれらの震動がそれ自体で残存し、生き続けているからこそ、それは何度でも繰り返し圧縮され、我々の現在の知覚イマージュとして再生する。だから知覚されたイマージュがそれ自体で単独に残存して記憶になるというよりも、身体機構、知覚機構、赤色光線、更に実在におけるあらゆる種類、あらゆる性質の運動が、それ自体で残存するのだと言わねばならない。そしてそうした全ての運動と連動しながら多数の震動を凝縮して我々の知覚内容（質的多様性）を形成する、その運動、働き全体が残存するのだと言わねばならない。特定の誰かに属するものとしての記憶が知覚イマージュを保存するのではなく、また特定の誰かの知覚イマージュがそれ自体で残存するのではなく、知覚の機制を通して膨大な数の振動を凝縮する作用そのもの、その作用と共存する実在の全ての運動それ自体が、自らの力で残存しているのである[6]。

生起する全ての運動がそれ自体で残存しているということが、完全な記録としての記憶を生成する。記憶とは「保存されているもの」ではない。自己保存し得るものこそが記憶なのである。

(3) 時間の成立について

したがって、イマージュとして知覚され想起される「私の思い出 (souvenir)」は、即自的な残存としての記憶一般の中から、知覚機構を介して限定的に摑み取られた部分的記憶である。イマージュの知覚には常にまた既に、記憶としての身体による記憶の総体の潜在的な凝縮作用がともなうが、それによって私は質的多様性という所与、つまり物質の知覚を獲得する。しかし記憶の圧縮を行なう身体機構それ自体も、記憶一般としての実在全体から差異化され、全体からの働き掛けを受けつつその凝縮作用を遂行している記憶である。これら全ての記憶が、特定の誰か、あるいは何かによって保持されるのではなく、それ自体の力で自己を保存している。全てに浸透し、結びつく力、全てを持続せんとするこの力そのものが記憶なのである。

以上から、身体機構が二重の意味で限定を行なっていることが理解される。

身体は、動性そのものである実在を暫定的に限定し分割するというその知覚機能そのものによって、単に物質だけでなく、私の記憶イマージュの限定をも行っている。我々が知覚し、想起するイマージュの個別性、特殊性は、身体という動的組織を生成する多種多様な運動、またそれらの運動と実在全体の運動との連動性、共振関係そのものから来ている。我々が想起し得る過去のイマージュが、身体を介して経験したものに限られるという事実は、そのことを如実に物語っている。それ自体記憶から成る身体機構は、イマージュの総体における無数の継起的震動を圧縮し、諸々の質として一挙に捉えることによって、諸々のイマージュの輪郭を限定する。この働きを、既に述べた身体の役割――それ自身多数の作用から成る動的組織としての身体

は、周囲の対象との間に多種多様な相互作用の連鎖を張り巡らし、それらの作用と不可分に結ばれたものとしての「中心」を形成している――と重ね合わせるならば、身体が、物質の知覚というよりは「知覚される世界と不可分なものとしての私（中心）」を一挙に獲得していることに気づかずにいられない。しかもこのような知覚世界の獲得は、身体機構の独立的な働きによるものではなく、身体にとって潜在的な現存である記憶一般の持続的な働き掛けを推進力としている。身体は、実在全体の指向によって質的多様という所与を得ているのであり、私の知覚機能そのものが「私の意識」「私の生涯」を唯一独自のものにし、その射程を限られたものにする。この限定された知覚世界が、「私の記憶」という個別的な記録内容の基底を成すのである。

ベルクソンの知覚理論は、「中心としての私の身体」や「私の内的主観」といった概念を打ち破る内実を孕んでいる(7)。なぜなら、知覚機構に先立つという意味で潜在的な現存であるイマージュの総体は、我々の知覚する物質（身体）を、時間的にも空間的にもその限定された地平を遥かに超えるものとして内包するからである。それ自体が継起的震動の集積である身体機構は、多種多様なリズムの莫大な震動の集積としてのイマージュ総体のうちにあって、知覚されないために潜在的ではあるが即自的に存在するそれらの運動と不可分な全体を形成している。

「物質は、無数の震動へと解消されるが、これらはみな切れ目のない連続をなして結びつき、相互に連動していて、一つ一つ慄きのようにあらゆる方向へ走る」(MM 234)。

その意味で、私の現在知覚している身体や物質は権利上、我々が通常それに認めている射程や輪郭をはるかに越えた時空的拡がりを有する。私が現在知覚している身体は、身体機構による知覚の成立に先立って活動するイマージュ総体の諸作用の蓄積の一つの効果であるのだから、身体とは、我々には知覚することのできない現存（身体にとっては過去であり記憶を意味する）から持ち込まれた、記憶一般のいわば可視的な集積なのである。

「可能的な最短時間の光の知覚が一秒の何分の一か続く間にも、無数の振動が生じていたのであって、最初の振動と最後のそれは、無数に分かたれる間隔によって隔てられている。だから諸君の知覚は、たとえ瞬間的であっても、計算できないほどたくさんの思い出される(remémorés) 諸要素から成っていて、本当は、あらゆる知覚は既に記憶なのだ」(MM 166-167)。

従って逆説的に言えば、我々は現在知覚している私の身体や物質的世界について、それがいつ始まったのか、いつ生じたのかを言うことは出来ないが、それが常にまた既に――我々が通常それに与える時間的な枠組みを越えて――存在していると言うことは出来るのである。身体や物質が差異化されてくる源泉である記憶一般は、「物質の知覚」に潜在的に結びつき、共存している。つまり単に身体を通して知覚される生死や生起といった状態によって区切られる以上の時間的拡がりを、身体及び物質の「現在」は隠しているのだ。

「我々の現在は、何よりもまず自分の身体の状態である。反対に我々の過去は、もはや働いていないが働くことが出来るであろうもの、現在の感覚の内に入り込んで働きつつ、そこから活力を借りようとするものだ。回想 (souvenir) はこうして働きつつ現実化する瞬間に、回想であることを止め、再び知覚になるのである」(MM 270)。

知覚の機制と潜在的な共存関係にある運動の総体、知覚されない記憶の総体としての即自的過去は、ここで改めて身体との関係性において「もはや働いていないもの」と規定されることになる。変化する実体そのものである実在において、身体の運動と共振し連動するところの運動が「現在」をなし、それに相対するものとしての「過去」をつくりだす(8)。ということは、知覚機構にとって潜在的な現存であり原的な記憶であるイマージュの総体は、身体との関わり如何で可変的に「働いていないもの」つまり「過去」となり、また「現在」になり、「未来」になり得るものであるということがわかる。

例えば、我々の身体を介して記憶の総体から限定的に現実化されるものとしての物質は、身体に常に与えられているという意味で「私の身体＝現在」を構成する。しかし、物質が身体に与えられているのは、それが既に知覚機構を介して無数の運動から静的状態へ、すなわちもはや働かないものへと圧縮されているからである。従って、物質は潜在的かつ即自的な過去として身体（現在）に現前するものである。更に物質は、我々の知覚を契機として相対的に静止させられるのだから、決して無力なのではなく、いつでも身体の知覚と結びつき得るものとして活動し、身体（現在）と共存している。それゆえ物質は、身体にとって「未来」そのものであるとも言えるのである。

つまり「現在」とは、その働きが身体に全的には与えられていない実在の総体――この意味で「過去」であり「未来」でもある実在の総体――のうちにあって、身体と連動している実在の運動全てを指示している。これは我々が日常考えている直進的な時間概念とはかけ離れていよう。し

かし身体を媒介とする知覚機構は、それ自体としては「絶えず再開する現在」[9]であり同時的に共存する無数の作用反作用から成り立つイマージュの総体に、時間性の表象を持ち込む機制なのである。

獲得されるのは時間そのものではなく、継起的な時間の中で展開されるものとしての知覚世界である。実在を、連続的な時間を有する世界としてとらえることは、実在全体の動きに見いだされる一つの明白な動きである。あらゆる種類の作用反作用が同時的に生起するところのイマージュ総体に、知覚機構は「働いていないもの」を導入する。全実在の運動の共存であり自己保存する運動そのものであるイマージュの総体は、我々の知覚を通して、作用を終えたものとしての「過去」を――それはこれから利用され得るものとしての「未来」でもある――背後にひかえる世界として、即ち過去―現在―未来という継起的な分節を有し、時間的にも空間的にも有限な世界（私）として照らし出されるに至るのである。

ゆえに言葉の完全な意味で実在するのは、実在全体のあらゆる現実的運動が共存するところの唯一の時間であり、記憶一般である。事はあたかも、それ自体が一つの動きであり一つの時間である実在が――それ自身のうちに根を下ろしながら――その一部である身体機構を介して、過去―現在―未来から成る継起としての時間性、身体に固有の時間性を生きるものとしての自己を認識するに至るかのようだ。

そこには明確なある指向が見出される。イマージュの総体は、その一部である身体機構を介して、自己のうちに確実に新たな事態を招聘し、同時的な作用反作用において相殺され中和化されているところの実在全体を、自己自身を、絶えず新たに創造しなおそうとしているように見える[10]。つまり、端的に運動でありそれ自体で自足した運動である自己を、身体を介して部分的かつ暫定的に「働いていないもの」にし、自己を「現在」「過去」「未来」へと分節化することによって、逆に、決して完成しない、何ものも決して終わらない事態を創造しようとするかに見える。

身体が周囲の事物に不確定な作用を及ぼしていくそのやり方は、自らは不動な中心が周囲の事物を動かしていく、といった性質のものではありえない。身体は、それを構成している無数の現実的運動によって、イマージュの総体におけるあらゆる種類の莫大な運動と作用反作用をなし、そのこと自体で既にイマージュ総体の「与えられ」を現実的にも潜在的にも刻々と更新し続けている。イマージュの総体における一つの「現在」を演じる身体は、この実在の「与えられ」全体、この「与えられ」の位相そのものを絶えず変革していくことを要請されている。身体、つまり実在は、そうした指向性を自身のうちに内包しているのだ。ということは、要するに、この「与えられ」そのものが――こういってよければ、世界がどのようなものとして見えているかということが――私自身であり、またあなた自身であるということなのだ。身体は、この世界がどのように見えているかということ、即ち「与えられ」がいかなるものであるかということを、常に、決定的かつ絶対的な問題として我々に突き付ける。身体は、実在の「与えられ」を現実的な行為によって変えていくことを絶えず指向している。身体は、世界のあれやこれやの局限的な様相が変化していくことではなく、「与えられ」全体の様相そのもの、また世界の見え方そのものが変わっていくことを要請するのである。

ベルクソンは、イマージュ概念を基礎とした知覚理論を徹底的に推し進めることによって、知覚と潜在的に共存する実在の持続的作用、つまり記憶一般の実在性を指し示すに至る。そしてこの記憶は、身体という枠組みに限局される「中心」「私」「主観」「精神」の不条理性を照らし出し、多種多様な運動が潜在的に共存しているところのいわば一元的な持続に参加する多様な「与えられ」「知覚世界としての私」を導出する。実在は、つかみどころのない変様としての自己ではなく、そうした自己を端的にまっとうすることではなく、対象を有する自己、自己認識を有する自己を獲得するべく、運動の総体から一定の運動（物質）を差異化するのである。

3．全てを結びつけるものとしての記憶

知覚を介して与えられているのは、実在の全的所与ではなく、限定的な所与としての諸イマージュ――私の世界、身体、記憶心像――であるが、言葉の完全な意味で存在するのは、そうした全てのイマージュがそこから差異化されてくるところの記憶であり、知覚世界や心身という個別的な与えられを形成し続ける運動そのものとしての記憶一般である。身体機構の運動、知覚機構の運動、また他の全てのイマージュの運動がそこに不可分に結びついているところの記憶一般、この全的な記憶だけが、それ自体で自己の全ての過去を保存し、現在を演じ、未来を創造している。

知覚の場面で見たように、我々の身体機構は単独で実在の限定を行なっているのではなく、実在の総体が「物質の知覚」すなわち質的なものの集合としての「私＝知覚世界」の差異化を即自的に進めていて、知覚機構はその見えないが繋がれている背後からの、しかし確実な力に推し進められて、実在の差異化の作業を受け継ぎ、遂行している。身体機構は、その収縮作用を通して瞬時に実在の無数の継起的運動を圧縮し、様々な質を、即ち知覚されるイマージュの内容となるところの質的多様を形成する。従って、我々

が知覚するイマージュの基底には常にまた既に、存在論的記憶の可視的集積である身体による存在論的記憶の総体の潜在的な圧縮が現存する。このことと、我々が物質の知覚において、あらゆる対象を「それ自体において」とらえているということ、我々の身体に現前する諸対象のあらゆる異質的な運動を「一挙に」とらえていることを考慮するならば、我々は次のように記憶を規定し得るであろう。

実在する唯一の時間であり、持続そのものであるこの記憶は、全てを有し、全てを結びつけ、全てを保持する根源的な力である。そこでは全てが不可分なものとして、全体の動きの中に融合している。そのためこの力は個別的な対象を認識したり、特定の対象に働き掛けたりすることができず、自己自身に対して実効的に無力なまま満ちあふれている。全てが融合し区別のつかない動きとして存在している記憶一般は、対象を認識するもの、働き掛けるべき対象を持つものへと自己を差異化することによって、自身に対して無力な動きである自己を超えようとするのである。

知覚を持たず、従って対象を持たず無力であるが、全てを呑み込み、自己のものとし、全てに結びつこうとし、全てを持ち続けようとする、この記憶一般そのものを考えてみよう[11]。そこではおそらく、身体を通して分節化されている過去・現在・未来より以上のものが、絶え間ない現前という形で共存しているであろう。しかしそれはまだ何らの明確な対象も持っていない。一方、私の個別的な意識の発生について考えてみると、そこには「意識が発生した」というよりも「視界がはっきりした」という表現にふさわしい移行が見いだされる[12]。「意識が発生した」というよりも、現前そのものとしての記憶一般に、個別的な、限定された視界が――漠然としたものではなく諸対象が明確に区別される世界としての――与えられるという方が事実に即しているように思われる。動であるものを限定し、圧縮して諸々のイマージュを暫定的に獲得するという知覚機構の働きそのものが、現前としての記憶一般を「私の知覚世界」へと限定する。記憶一般は、限られた視界で、限られた対象を有する記憶として、しかし実効的に対象に働きかけることの出来る記憶として現前し続けることになるのである。

知覚機構を介して与えられる物質は常に、ある動かない基体が運動することによって存立するものとして認識される。それは知覚の機能そのものが、実際には動きであるものを働かないものへと凝縮してとらえることに存するからであるが、その機能は、それが知覚機構の対象である限りは、どれほど特殊な方法を用いて観察しようとも、同様の仕方で働くことになる。従って、身体が差異化されてくるところの記憶一般についても、知覚世界の用語で考え、規定せざるを得ないが、誤解を恐れずに言うならば、実在とは、あらゆる作用反作用が一挙に遂行され、いわば動きに満ちあふれたもの、それ自体としては積極的に働きかけるべき明確な対象をもたず、ただひたすらに「動」であり変化であるものと言えるであろう。

つまり記憶とは、あの運動でありこの運動であり、私の身体であり、私の知覚世界であり、私の意識であり、そしてあの運動と私の身体を隔てている拡がりであり、これら全部を内包している空間であり、また私の身体には知覚することのできないあらゆる潜在的な運動であり、意識一般である。要するに記憶とは、全実在を抱懐し、満たしている何ものかである。そしてその力の本質とはおそらく、全てを結びつける力であり、全てを保持しつつ自己塑成しようとする即自的な意志であり、希求であり、衝動である。

結　び

知覚機構の果たす役割を観察する限り、実在は端的に「動」であることにとどまらず、「自己認識を持つ運動」への移行を指向しているように見える。運動そのものとして見るならば、実在は、あらゆる動きを実在のあらゆる細部にわたって一挙に遂行するものとして、相互に相殺し合い連関し合う無数の運動をひたすらに遂行するものとして、ただしそれ自体は実効的に無力である強大な力として満ちあふれていることもできたであろう。

端的に運動であり、自己充溢する力そのものであり得るはずのこの実在が、なぜ対象を認識する運動、自己認識する力へと差異化しなければならないのであろうか。実在を非人格的な運動として考えてみよう。この実在は、それ自体において全ての運動を一挙に与えられると同時に、その運動を生き、遂行するものであるだろう。それは対象を持たず、自己認識を持たないがゆえに無自覚な運動であって、自己自身に対して無力なものとして満ちあふれているであろう。

では今度は、ある指向を有するものとしての実在を考えてみよう。そこでは、端的な動から、自己を表象し対象を表象する存在、つまり自己認識を有し自己を再創造し得る存在としての自己を獲得するべく、実在の部分的な差異化が即自的に行なわれる。身体を媒介とする知覚機構は、実在の運動を相対的に不動化し、これによって膨大な記憶或いは未来を背後に控えた「現在」を獲得する。動としての実在は、「過去」「現在」「未来」という時間的分節を有する世界、いわば実効的に自己蘇生する潜在性を秘めた世界として自己を差異化するに至る。運動そのものの多様性という観点から見れば、確かにこの移行には理があるだろう。実在は不動化した物質（身体）を利用することによって、それ自体としては対象を持たず実効的に無力である自己運

動の只中に、ある新しい相互関係を確立し、全体に新たな作用を返すことに成功する。実在のこのような差異化は、身体をしてその膨大な過去（未来）を自覚的、選択的に利用させるのであり、それによって絶えず新たな、多種多様な事態が生み出されることになる。

しかし、このような利点、即ち身体によるこの種の創造的行為もまた、それ自体として見れば、実在の運動の一つのパターンであり、他の運動と何ら本性上の差異を有するものではないかもしれない。ベルクソンの規定に従えば、どれほど多数の複雑な運動が寄り集まろうと運動は運動であり、それ以上のものではないからだ。ならば、より多様な運動であるということも、運動それ自体が価値であるという以上の価値、積極的な価値はないのではないか。実在が自らを差異化し、自己認識を有する運動として自己塑成しようとするその傾向は、実在が端的に運動それ自体でしかなく、またそれが運動の多様化以上のものをもたらさないのだとすれば、説明困難な移行と言えるのではないだろうか。

どんな運動であれ、特定の方向に進もうとすれば、その動きに対する反作用を受けずにはすまない。それが端的に運動である限りにおいては、どんな偶然の作用が生じようとも、周囲の無数の反作用によって最終的に相殺され、中和されてしまわないような作用はない。従って、この対象のない、力の均衡のとれた充溢を破って特定の運動を差異化するためには、いわゆる物理的な力では全然足りない。物理的にどんなに強大なエネルギーであっても、一定の活動ののちには、他の様々な力の影響を被り、相殺されて、また均衡のとれた全体の動きの中に溶け込んでしまう。しかし周囲からのいかなる作用を被ろうとも、絶対に相殺されない力、動きというものがある。それは自己認識する運動、すなわち我々が身体を介して実在に与える作用であり、我々の意識へと限定された記憶一般の力そのものである。

常に均衡を保とうとする無数の作用のただ中で、自己を差異化し新しい作用を与えていくには、まさにありとあらゆる性質の力を必要とする。力強さ、しなやかさ、粘り強さ、優しさ、賢さ、慎重さ、堅固さ…等々。そして我々の個別的な意識の呈示するそうした力は、あらゆる対象にあらゆる意味で結びつこうとするという意味において、破格のものである。記憶一般は、本質的に、周囲の全ての作用に結びつき、融和し、浸透し、全体として充溢しようとする指向を内包しているが、それだけではない。実際、記憶一般から限定される我々の個別的意識および身体は、物質的対象のどのような影響をも受け入れる度量の広さと柔軟性を示すものでありながら、決してそうした作用に相殺されてしまうことはない。あらゆる種類の対象をも貪欲に知ろうと欲し、そのどんな作用にも関わっていき、結びつこうとする。そのためにどんな痛手を被ろうとも、決してそれを無意味なもの、関わりのないものとして放棄したりしない。全てを結びつけ、全てを受け入れ、全てを堪え忍ぶが、決して最終的に中和されることはない。そしてその破格の力そのものを、決して相殺されない力として、周囲に返すのである。

こうした全ての力が、それ自体で存在し、自己を差異化していくのでなければならない。実在は既に、対象のない充溢としての動としてではなく、自他を認識する有限な運動が自己展開していく世界として知覚されているが、こうした動きを、文字どおりに非人格的で純粋な動として考え得るものであるかは疑問の余地がある。ベルクソンが後に『創造的進化』や『道徳と宗教の二源泉』において、実在の本質を、等質的な動性そのものとしてではなく、意志や希求、躍動といった一種人格的な意味を有する用語によって規定しなければならなかったわけは、ここにあるだろう(13)。

実在とは、自己をその全ての動きの深みにおいて咀嚼し、保持しようとする意志そのもの、自己蘇生する希求そのものであるような充溢だろう。記憶とは、知覚機構を契機として獲得される継起的時間表象を通じて、自らを認識し、自己を呑み込み、自己を能動的に創りだす道を切り開く希求であり、衝動であるだろう。それは自らを材料として自らに特定の対象を与え、それによってますます自己を愛し、その愛によって自己に意味を与え、価値を与える。それは自己を超出することによって、より大きな躍動を自己に与え返すのである。

凡例

1．次のベルクソンの作品の引用には以下の略号を用いた。
2．（　）内は参照及び使用させていただいた翻訳である。
3．ベルクソンの引用には以下のテクストを使用した。
Henri Bergson, *Œuvres*, puf, 1959.
DI＝*Essai sur les donées immédiates de la conscience*, 1889（邦訳『時間と自由』世界の大思想Ⅱ－11、河出書房、1967）本文中では『試論』と表記する。
MM＝*Matière et mémoire*, 1896（邦訳『物質と記憶』ベルグソン全集２、白水社、1965）
EC＝*L'Évolution créatrice*, 1907（邦訳『創造的進化』世界の大思想Ⅱ－11、河出書房、1967）
ES＝*L'Énergie spirituelle*, 1919（邦訳『精神のエネルギー』ベルグソン全集５、白水社）
MR＝*Les Deux sources de la morale et de la religion*, 1932（邦訳『道徳と宗教の二源泉』世界の名著64、中央公論社、1979）

註

(1)　イマージュという概念によって表現されているのは、端的に知覚されるもの全てである。意識状態であれ外的世界であれ、直接的に知覚されるものを全てイマージュと規定することによって、

ベルクソンは精神と物質が持つ実在性を統合的な存在の場面へと位置付ける。

従来、物質に関する諸理論においては、二つの見地――観念論および実在論の提示する物質概念――が主要な地位を占めてきた。観念論は、我々の見たり触れたりする諸対象を我々の心の中にしか存在しない「表象」とみなし、物質それ自体の実在性を認めない立場をとる。他方実在論は、対象はそれを知覚する我々の意識とはまったく独立に存在する「事物」であるとして、我々の持つその知覚と「事物」との間に越えがたい障壁を打ち立てる。これに対しベルクソンは、常識的な物質の見方を採用し両者の観点を前提しない地点から議論を始める(cf.MM 1-2)。精神や物質に関する諸理論が表象や事物等に分離してしまう以前の物質、即ち端的に意識に与えられるものとしてのイマージュを出発点として、このイマージュという直接所与性から、実在性に関して考え出される諸々の人為的な区分けをいったん取り払い、そうした区分を前提することのない出発点を確保するのである。

cf. 檜垣　立哉、『ベルクソンの哲学』、勁草書房、2000年、九十三頁。

「ベルクソンにとって、物質であれ現実化される記憶であれ、知覚される世界の実質はすべてがイマージュである。イマージュは心理的概念でも物理的概念でもない」。

cf. É. Bréhier, "Images plotiniennes, Images bergsoniennes", *Les études bergsoniennes*, Vol. II, 1949, p.112.

cf. J. Delhomme, "Durée et Vie dans la philosophie de Bergson", *Les études bergsoniennes*, Vol. II, 1949, pp. 137-138.

cf. F.C.T. Moore, *Bergson, Thinking Backwards*, Cambridge university press, 1996, pp.18-53.

(2) cf. MM, pp.11-52.

(3) 「記憶の実践的な、したがってまた通常の作用、すなわち現在の行動のための過去の経験の利用、要するに再認ということは、二つの仕方で行なわれるのでなければならない。ある場合には、それは行動そのものの中で、状況に適した機構のまったく自動的な利用によってなされるだろう。他の場合には、それは、もっとも現在の状況の中にくい入る力のある表象を、現在に導くために過去へ捜しにいく精神の労働を含むだろう」(MM 82)。

ベルクソンによれば、この二つの記憶のうち、すぐれた意味で記憶と言えるのは、二つ目の表象としての記憶である。一つ目の自動運動としての学課の記憶が記憶と呼ばれ得るのは、それを獲得したことを我々が回想するからである。そしてその回想が可能なのは、あらゆる出来事を記録する第二の記憶があるからである。だから二つ目の記憶こそがすぐれた意味で記憶であり、記憶力そのものなのである(cf.MM 89)。

(4) G. Deleuze, *Le bergsonisme*, puf, 1969, pp.54-55.

cf. B. Gilson, *L'individualité dans la philosophie de Bergson*, J. VRIN, 1985, pp.19-36.

cf. H. Gouhier, *Bergson et Le Christ des Évangiles*, J. VRIN, 1987, pp.39-61.

(5) cf. MM, pp.156-166.

「純粋記憶のこの根本的な無力さは、それが潜在的状態で保存されるわけを、まさに理解させてくれるものである。…もし意識が現在すなわち現実に生きられるもの、つまり行動するものの特徴にすぎないとすれば、行動するものは意識であることをやめても、必ずしも何らかの仕方で存在することをやめるわけではないかもしれない。言葉をかえていえば、心理学的領域においては、心理的なものは存在の同義語ではなくて、単に現実的行動あるいは直接的有効性の同義語にすぎぬであろうし、この言葉の外延がこのように限定されるならば、無意識な心理状態、つまり無力なそれを考えることも、さほど困難はないことになろう」(MM 156-157)。

(6) cf. MM, p.169.

(7) cf. DI, p.62.

ベルクソンは、無媒介的に意識に与えられているもの、即ち直接的な所与を主観的なものと定義している。主観性に関するこうした記述に留意するならば、無媒介的に意識に与えられたもの、つまり端的に知覚されるものとしての「物質の知覚」とは、それ自体既に主観的なものと言い得るのではないか。イマージュ総体の「与えられ」である物質の知覚とは、それ自体が「中心」であり、「私」であると規定され得るのではないか。

(8) ES, p.136.

(9) MM, p.236.

(10) cf. MM, p.264, 279.

(11) 「純粋記憶は、ひろがりをもたず無力であり、どんな仕方でも感覚にあずかることはない。…イマージュは現在の状態であり、その出所である記憶によってしか過去を分有し得ない。記憶とはこれと反対に無用なままでいる限り無力であり、あくまで全く感覚を混えず、現在との繋がりを欠いており、従ってひろがりをもつことがない」(MM 156)。

(12) 「あらゆる物体の全ての点からの影響を全部知覚するということは、物質的対象の状態にまで落ちてしまうことであろう。意識的に知覚するとは、選択することを意味し、意識は何よりもまず実践的なこの弁別に存する」(MM 48)。

(13) cf. EC, pp.246-271.

cf. MR, pp.97-103, 240-282.

Memory as Reality
On the Concept of Memory in Bergson's *Matter and Memory*

Miyuki KAMAHORI

At the beginning of *Matter and Memory*, Henri Bergson remarks that this study affirms the reality of spirit and the reality of matter. He tries to determine the relation of these two by way of a precise example: memory. This statement implies a view that would overcome the formal realism and idealism presented about matter, and also would overcome the dualism that general theories of the relation of spirit and matter assume. But Bergson's memory that provides us a key to interpretation of the relation of spirit and matter does not mean simple remembrances composed of psychical states. In other words, Bergson's memory is not an assembly of remembrances consisting of daily experiences or the personal events of individuals.

Therefore, I think two points need to be considered. First, we are going to specify exactly what Bergson means by the concept of memory. Second, we are going to see how he comes to unite the reality of spirit and matter only in memory. We shall also see how body as matter is defined as a kind of memory by considering the idea of "pure perception" in *Matter and Memory*.